

わたしの好きな昔話（4）

『因幡の白兔』（ちりめん本）



山本 真巳

日本にも、他の国々と同様に素晴らしい昔話がたくさん存在します。ほとんどの人は、日本の昔話は何かと問われると、子供の頃に親から聞いたり、読んでもらったりしたお話を挙げるのではないのでしょうか。私も子供の頃に聞いた『桃太郎』や『花咲じいさん』の名前がすぐに頭の中に思い浮かびます。しかし、好きな昔話となると話は違ってきます。私の好きな昔話は『因幡の白兔』です。みなさんもこの物語は御存知でしょうね。京都外国語大学図書館のホームページで、ちりめん本の中にこの昔話の英語版を見つけた時、私は嬉しくなりました。ちりめん本の解説（抜粋）は次の通りです。

「80人の兄弟神が因幡の八上比売（やかみひめ）のもとへ求婚に出掛けた。彼らはその途中で赤裸の兔に会い、兔に海水に浸かり風に吹かれていると治ると教えた。兔は淤岐島<おきのしま>から海を越えるため、鰐を騙し並べさせてその上を渡り、それが露見して鰐に皮を剥がされていた。兄弟たちの荷物を持ち、遅れて通りかかった81番目の兄弟が、彼の兄たちに言われた通りにして傷を悪化させ苦しむ兔に、淡水で身を洗って蒲黄<がまのはな>の上を転がると良いと教えた。その通りにした兔は傷が治り、八上比売と国を得るのは彼だろうと告げ、その通りになった。」

ここに登場する81番目の兄弟というのは大国主命（おおくにぬしのみこと）であり、この物語は『古事記』の中でもよく知られている話の

一つです。鰐を騙した兔は悪いことをした報いを受けて皮を剥がれます。そして大国主命の兄たちに嘘をつかれて、更に苦しみを味わいます。しかし、大国主命は意地悪な兄たちとは違って、逆境の中にあっても優しい心を失わず、苦しんでいる兔を助けてあげます。兔は傷が治って良い兔になり、大国主命に幸運が訪れることを予言します。私が覚えている内容はこのようなものですが、日本人にとって親しみやすく、日本の昔話の特徴である「良いことをすると良いことが待っている」という展開があります。そしてもう一つ大事なのは、悪いことをして罰せられるのは当然ですが、その後救われて反省し良い方向へ立ち直ることが描かれています。そういう点で、私はこの『因幡の白兔』が気に入っています。

私は大学に入ると、外国人に京都の寺社をガイドするFGCというクラブに入部しました。ガイドをするにあたり寺社の情報を色々覚えていくうち、清水寺にある地主神社にまつわる伝承の説明の中に、この『因幡の白兔』が関係していたことを知りました。この話は、キリスト教やイスラム教などの一神教とは違い、多くの神々が世界には存在していると考えられる日本人独自の宗教観や神道に関連した話なので、それらを理解していないと外国人に理解してもらうには難しいのではないかと思います。ガイドをする時にその話の説明はしませんでした。しかし、悲惨な事件の多い現代において、このような心温まる物語が日本にあることを積極的に取り上げてみてもよかったような気がしています。私はそのような機会に巡り会うことはありませんでしたが『因幡の白兔』も含めて様々な日本の昔話を、日本語を学んでいる外国人に教えてみたかったと思っています。日本の昔話は日本人の考え方や性質を理解することに大きく役立つはずですし、昔話を通して少しでも多くの人々が日本の良さを理解してくれることを期待しています。

やまもと まみ（2009年度英米語学科卒業生）

